

源氏物語 末摘花の巻の本文と物語の享受 (一)

岩 下 光 雄

1

本稿は、「源氏物語 帚木の巻の本文の性格と系統」(信州豊南女子短大「紀要」第三号)に続く、末摘花の巻についての調査、研究である。空蟬の巻については、「源氏物語の本文と享受」(和泉書院 昭和六一年一〇月刊)で別に論述した。青表紙本系統の大島本に対する尾州家河内本の異文が、別本系統の諸本の異文とどのような関係にあるか、また、別本系統諸本の異文、当該以外の青表紙本系統諸本の異文相互の関係が、どのようになっているかを、手沢本(松尾聡校註「源氏物語」武蔵野書院)の頁ごとに明らかにしながら、本文の性格、系統を分析し、物語享受との関わりを考えたいくことにする。分類の基準は、この巻の本文の性格を考慮して、従来の拙論の基準には従わずに、十類に分類して精確を期した。しかし、実際にはこうした分類のすべてに互って、資料が存在するとは限らない。また、写真、影印本の場合は、朱書きや別筆による書き入れかを判断することは困難であるから、最終的に残された本文の形によった。但し、それによらなかった一、二の例外については、資料の分析のなかで理由を述べた。また、「イ」本として傍注されているものは本文として認めなかった。だが、これらの例はきわめて僅少で、論旨に関わる部分は少ない。次に、分類

の基準を示す。

第一類 河内本の独自異文

第二類 河内本の異文が別本系諸本と共通する異文

第三類 河内本の異文が大島本以外の他の青表紙本系諸本と共通する異文

第四類 河内本の異文が第二類、第三類を合わせもつ異文

第五類 第四類をほぼ合わせもつ異文

第六類 河内本の異文が別本系諸本とほぼ共通する異文

第七類 別本系諸本間の独自異文・共通異文

第八類 青表紙系諸本間の独自異文、共通異文

第九類 別本系諸本と青表紙本系諸本との間で共通する異文

第十類 別本系諸本と青表紙本系諸本との間でほぼ共通する異文

先ず、手沢本の三頁分⑥頁から⑦頁までを「資料 0」とし、異文を調査、分類した結果を例示する。各項の頭書きの算用数字は、手沢本の頁数、最初に示す本文は手沢本の本文であるが、第六類に限り河内本の本文を最初に示した。諸本の略称は「源氏物語大成」によったが、貴重本刊行会 日本古典文学影印叢刊、天理図書館善本叢書など、「大成」に未収録の写真、影印本については、それぞれ「穂」（穂久邇文庫蔵本）「天」（天理図書館蔵 伝冷泉為相筆本）の略称を用いた。河内本は、秋山虔、池田利夫両氏の編になる「尾州家河内本 源氏物語」（武蔵野書院）、陽明文庫本は、思文閣出版 陽明叢書「源氏物語」を用いて「大成」の誤校を正して資料としたが、それについてはいちいちことわらなかつた。分類の基準および以下の論述で、河内本とあるのは尾州家河内本、青表紙本とあるのは大島本である。また、

「天」は青表紙本、「穂」は別本として扱った。「穂」は、日本古典文学叢刊7「源氏物語 伍」の「書誌一覧表」に、阿部秋生氏が指摘されているように、末摘花の巻の本文は青表紙本であり、後光厳院御筆と伝えられる。秋山瑞穂氏（穂久邇本「源氏物語」の本文について）（国文学年次別論文集 中古2 昭和58年 学術文献刊行会）も、

穂久邇本の誤りの様相、親本が既に相当数の不審な辞句を持っており、青表紙本の中の陽明家本・池田本・国冬本の三本に非常に近く、しかし、青表紙本本文の枠からはみ出す辞句を持っている本文であること、その親本の本文を古典にあまり明るくない人が杜撰な書写態度で書き写したもの（349頁）

と指摘され、「現存の青表紙本と言われているものの範囲からはみ出すが、別本と言いつけるには青表紙本に近過ぎる、という曖昧な言葉でまとめることになる。」（349頁）と言われる。確かに穂久邇文庫蔵本は、山岸徳平氏をはじめ、従来、青表紙本系諸本として扱われてきたもので、その本文的性情、系統は、やはり基本的には青表紙本であると断ぜざるを得ないように思われる。だが、これを別本として扱ったのは、「資料 0」には、穂久邇文庫蔵本を別本として扱うべき異文が存すること、それによってこの諸本のもつ性情、系統論的位置を最終的には明確にすることができること、更に別本概念を明確にすることができると考えたからで、あえて異を主張するためではない。また、そのことによって、他の諸本の系統論的性情や系統論に関わる部分は全く存在しないと考えられるからでもある。

第一類

⑤ 飽かざりし——ナシ・⑤ 心深き——心にくき・⑤ 思し——おもほし・⑤ 見つけてしがな——見てしかな・⑤ 思し——おもほし・⑤ 一行を——一行にて・⑤ 離れたる——離れきこゆる人・⑤ つれなう——ナシ・

⑥ 折々——折ふし・⑥ 思す——おほしいつ・⑥ 侍ふ——侍ふは・

⑦ 居たるをもの——居たまへるをこと・⑦ 方——さま・⑦ 侍ら——はんべら・⑦ 疎う——疎うとしく・⑦ 侍る——侍

第二類

⑤年月——月日 陽・⑤思し——おもほし 陽・⑤ぬ限の——す 陽、御・⑤いどましき——いとましきとも 陽、御・⑤おもほえ給ふ——おほしいてらる 陽、御・⑤ことごとしきおぼえはなく——ことくしくはあらさらん人の御・⑤らうたげならむ人——らうたけならむを 陽・⑤人のつゝましき事なからむ——ナシ 陽・⑤わたり——わたり
に 陽・⑤御耳——かならず御耳 陽、御・⑤寄るばかりのけはひある——寄らるる 陽、御・⑤あるまじきぞ——あるまじきも 陽、御・⑤たるや——たるわざなりや 陽、御・⑤たとしへなう——たとしへなく 陽・
⑥やうに——やうなるに 陽・⑥などする——ぬる 陽・⑥多かりける——多かり 陽・⑥ねたう——ねたく 穂・
⑥便ある時——便に 陽、御・⑥折——時 陽・⑥思い——おほし 陽・⑥大輔なる——大輔なるか 陽、御・⑥にて
——にてそ 陽、御・⑥ありけるを——ありける 陽・
⑦かなしうかしづき——かなしうし 陽、御・⑦心細くて——心細きさまにて 陽、御・⑦語り——語りいて 陽、
穂・⑦聞え——聞えたり 穂・⑦とて御——と 陽・⑦問ひ聞き——問ひ 陽・⑦心ばへかたちなど——かたちも心は
へも 陽・⑦え知り——知り 御・⑦かひひそめ人——ナシ 陽、御・⑦給へば——給へれば 陽・⑦さべき宵など——
なにかはとてせめてもむつひはんへらす 陽、御・⑦ぞ——なむ 陽・⑦語らひ——さるへきよひくなんとに語ら
ふおりも 陽、御・⑦琴——しのひやかにかひひそめて侍べし琴 陽・⑦ぞ——なむ 陽、御・⑦とて——とのたまひ
て 陽、御・

第四類

⑤おくれし——おくれしほどの 陽、御、穂・池、肖、三・⑤うちとけたりし——なつかしかりし 陽、御・池、肖、

三・⑤とどめ——と、まり 陽、御・横、池、三・⑤にこそ——にこそは 陽、御・横、池、肖、三・

⑥大武の——大武のあま君の 陽、御・池、三・

⑦いとよしづき——よしつき 陽・横・

第六類

⑤ことくしくはあらさらん人の——ことくしうはあらさらん人の 陽・⑤らうたけならむを——らうたけならむ
御・

⑦かたちも心はへも——かたちも心はへなとも 御・⑦しのひやかにかひひそめて侍へし——しのひやかにかひひそ
めて侍るかし 御・⑦思ふたまふべき——思ひ給へるへき 陽、御・

第七類

⑤経れど——経れとも 陽、御・⑤こもかしこも——こもかしこも 穂・⑤け近く——け近う 陽・⑤似る——か
ゝる 御・⑤一行を——一行 陽、御・⑤離れたるは——離るるも 陽・離れたるも 御・⑤つれなう——つれなく
陽、穂・⑤後るゝ——後れたる 穂・⑤あまり——の 陽・

⑥やうに——やうにて 御・⑥さてしも——さても 陽・⑥するも——する 御・⑥空蟬を物の折々には——空蟬を
も 陽・⑥思し出づ——思し出つるをりあり 陽・⑥見まほしく——見まほしう 陽・⑥思す——覚て 御・⑥を
ぞえ——をそ 御・⑥たるが女——たる女の 陽・⑥侍ふ——侍ひけり 陽・⑥わかん——王かむ 御・⑥いたう——
いたく 陽、穂・⑥色好める——色好む 陽、御・⑥を君——ナシ 穂・⑥ければ——たれば 御・

⑦行き——いき 陽・⑦親王——みや 御・⑦いみじう——いみしく 穂・⑦御女——女の 陽・御女の 御・⑦居
たるをもの——居たるをこと 陽・⑦聞えければ——たれば 陽・聞えたれば 御・⑦やとて——やと 御・⑦方はえ

—はきき 陽・心は 御・⑦侍らず—給はず 陽・⑦人—こととしけに 御・⑦疎う—うとくしけに 陽・⑦給へば—給ひつれば 御・⑦なつかしき—すこしなつかしき 御・⑦語らひ—こゑに語らひ 陽、御・⑦人と—人に 陽・

第八類

⑤年月—年 天・⑤つゝましき事—つゝましき事の 横・
⑥乱れたりし—乱れくし 横・⑥侍ふ—侍ふか 天・⑥女なりけり—女 横・⑥いと—ナシ 横・
⑦末に—末にて 天・⑦かなしう—ナシ 池、肖、三・⑦居たるをもの—居たまひたるを 肖、三・⑦方—方に 横・⑦人と—人とは 池・⑦一種や—ひとくてさや 横・

第九類

⑤恋しく—恋しう 陽・横・⑤心強きは—心強きはた 陽・肖・
⑥多かりける—多かりけり 御、穂、横・池、肖、三、天・⑥また—ナシ 陽・横・

河内本の独自異文は十六例で、青表紙本に対する河内本の他の異文四〇例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・18 (ロ)陽・御・17 (ハ)御・2 (ニ)穂・2 (ホ)陽・穂・1

第六類のほぼ共通する異文は次のような関係で共通異文を形成する。

(ロ)陽・御・(1) (ハ)御・(3) (イ)陽・(1)

(ロ)の諸本部分に括弧をつけていないのは、第二類とは別の個所の異文であることを示し、算用数字の括弧は、ほぼ共通

する異文であることを示す。(1)(御)・(3)は、陽明文庫本と河内本との共通異文十八例のなかに、御物本とほぼ共通する異文が三例存在することを示す。以下の資料では、第二、六類を同列に集計する。河内本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。括弧内は、やはりほぼ共通する異文の内数である。

陽・38(2) 御・23(4) 穂・3

第六類の異文数は一例である。これらの結果を総合すると、河内本の異文総数五十七例中、別本諸本と共通するもの、ほぼ共通するもの(以下これらを合わせて「共通異文」という)は四十一例で、共通異文率は七一・九%とかなり高い。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本六六・七%、御物本四〇・四%、穂久邇文庫蔵本五・三%である。共通異文数に対する諸本の親近度は、「陽」九二・七%、「御」五六・一%、「穂」七・三%である。これによれば、河内本は別本系統の陽明文庫本に最も親近性を示しているが、なお御物本とも無関係ではないと考えるべきである。だが、「資料 0」に関する限り、御物本が単独で共通異文を形成するものは二例に過ぎず、数値的には穂久邇文庫蔵本と同じであることを考えると、直接的には陽明文庫本とのかかわりを重視すべきではあるが、なお、両本に共通する異文も十七例に達していることは考慮すべき問題である。

河内本の異文が、大島本以外の他の青表紙本系諸本と共通する異文は存在しないが、別本系諸本と共通し、かつそれらの諸本が、河内本と共通異文を形成するものは存在する。青表紙本系諸本とのかかわりが、この巻の「資料 0」ほど顕著ではなかった桐壺の巻以下の巻々に対して、未摘花の巻のこうした特徴は、やはり注意していく必要がある。しかも、六例中四例が最初の⑥頁に集中的にあらわれ、その他の頁にはそれぞれ一例だけが見られるに過ぎない。それは、

(1)陽、御、穂・池、肖、三・

(2)陽、御・池、肖、三・

(3)陽、御・横、池、三・

(4)陽、御・横、池、肖、三・

(5)陽、御・池、三・

(6)陽・横・

のような形であらわれ、別本では「陽、御」、青表紙本系諸本では「池、三」の関与する比率が、最も高い。

次に、別本系諸本の独自異文について集計すると、

(イ)陽・17 (ロ)御・16 (ハ)穂・4 (ニ)陽・御・4 (ホ)陽・穂・2

となる。別本の独自異文総数は四十三例で、諸本の独自異文率は「陽」五三・五%、「御」四六・五%、「穂」九・三%である。それに対して共通異文率はきわめて低く、「陽」二三・五%、「御」二五%に過ぎない。穂久邇文庫蔵本を中心としたそれは、「穂」五〇%、「陽」一一・八%である。

次に、別本系諸本と青表紙本系諸本の間で共通異文を形成するものを集計すると、

(イ)陽・横・2 (ロ)陽・肖・1 (ハ)御、穂・横、池、三、天・1

となり、その数値はきわめて少ない。横山本・陽明文庫本が、七五%と高い比率で異文の形成に関与している。

以上、「資料 0」の集計、検討の結果を通して、次のように要約することができるように思う。

(一) 河内本の独自異文率は四〇%である。桐壺の巻、一四・七%・帚木の巻、三八%・空蟬の巻、一四・九%・夕顔の巻、三九・五%の独自異文率と比較すると、帚木、夕顔の巻に近い。統計的基準が巻々によって多少異なるので、単純に比較することはできないが、異文の独自性も数値としてはかなり高い。ただ、音便等の表記にかかわるものが三例あることも注意すべきである。

□ 河内本の異文総数に対する別本の共通異文数の百分率「共通異文率」は、七一・九%に達し、共通異文数に対する諸本の異文数の百分率（近親度）は、陽明文庫本九二・七%、御物本五六・一%、穂久邇文庫蔵本五・三%である。御物本の親近度は、陽明文庫本の六一%に達するが、陽明文庫本とともに共通異文を形成するもの十七例、単独で共通異文を形成するものは二例に過ぎず、その数値は穂久邇文庫蔵本と同じである。この事實は、穂久邇文庫蔵本を「資料 0」の集計により、別本として扱った事とともに、微妙な問題を示唆するもののように思われる。山岸徳平氏をはじめ、従来この本は、青表紙本系統の諸本として扱われてきたものであるが、最近、その別本的性格について再検討が加えられてきた。さらに、河内本に対する陽明文庫本、御物本の、こういうかかわり方は、御物本の青表紙本系統の諸本とのかかわり方の問題とともに御物本の本文的性格、系統を考える上で注意すべきことからである。

□ 河内本の異文が、別本系諸本、青表紙本系諸本とともに共通異文を形成することは、混態現象または逆に原本の形態を伝えるものとして従来の巻々についても、若干の用例を指摘してきた。しかし、末摘花の巻には、「資料 0」に六例、しかも最初の頁に四例と集中的にあらわれている。こうした顕著な本文的性格を、以下の資料にも期待していくことは困難のようにも思われ、詳細な分類は、「資料 0」を基準としたための徒勞に終るかも知れない。だが、そうした錯誤の過程も、やはり本文の性格と系統を考えていく上では、必要なことのように思う。部分的な検討で全体を類推したり、ある既定の論拠に立脚して演繹したりすることには、かえって、いろいろと問題が多いからである。ただ、こういう本文的事実を集積していくという営みを通して、その本文の実体を明確にしていくことができるはずである。

四 別本系諸本の独自異文は、異文総数四十三例に対して、独自異文率は、陽明文庫本五三・五%、御物本四六・五%で、両本の独自異文率は、きわめて接近している。これに対して穂久邇文庫蔵本は九・三%と非常に低い。穂久邇文庫蔵本のこうした性格は、河内本との共通異文率、親近度にも見られる特徴である。「資料 0」に関する限りは、や

はり別本として扱わざるを得ないが、以下の資料にも、特殊性を保ちながらもこうした本文的事実を指摘することができるだろうか、やはり問題があるように思われる。更に、別本系諸本間の共通異文は、「陽、御」の形であらわれるもの四例、「陽、穂」二例に過ぎず、共通異文率は、「陽」二三・五%、「御」二五%ときわめて低い。だが、穂久邇文庫蔵本を中心とする共通異文率は、穂、五〇%と高く、陽、一一・八%と逆にきわめて低くなっている。こうした別本系諸本間の異文相互の關係と、対河内本との異文關係を相關的に考えていくと、別本系諸本の系統論的位置について、示唆するところが大きいように思われる。だが、それらの結論は、やはり、全体的な資料の検討、集積を通して、なされなければならない。

(五) 既に(三)の問題として、河内本を介して考えてきたところであるが、それを除外し、別本系諸本、青表紙本系諸本の間で直接共通異文を形成するものが四例見られる。定家の青表紙本、光行、親行による河内本の成立が、原形的な本文または校訂本文そのものを校合している事実からすれば、それは当然のことである。だが、そうした本文的事実を指摘できる例は、従来の巻々では比較的僅少であった。やはり、(三)にかかわる問題として、こういう事実を指摘していくことが、以下の資料についても見られるとすれば、本文の性格、系統を考えていく上で、やはり示唆するところが大きいはずである。

以上述べてきたような、「資料 0」の本文の性格、系統論的關係が、末摘花の巻の一帖全体、または一帖の一群の物語に亘って指摘することができるか、本文系統論の上で重大な問題を示唆することになる。以下、手沢本の頁を追って二頁分を一資料として、異文を分類、集計しながら、検討を加えていくことにする。

「資料 1」 ⑧・⑨

河内本の独自異文は七例で、青表紙本に対する河内本の他の異文十九例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・御・9 (ロ)陽・9 (1) (ハ)御・1

河内本の独自異文率は三六・八%で、「資料 0」の四〇%とさして変らないが、音便など表記にかかわるものが二例あり、内容的にも深くかわる重要な異文は存在しない。河内本の独自異文は、数値の面からも、内容の面からも、その独自性はかなり低いといふことができる。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元する。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・18 (1) 御・10

第六類の異文数は一例である。河内本の異文総数二十七例中、「共通異文」は二十例で、共通異文率は七四・〇%である。この数値は「資料 0」とやはりさして変らない。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本六六・七%、御物本三七・〇%である。「共通異文」数に対する諸本の親近度は、「陽」九〇・〇%、「御」五〇・〇%である。この数値も「資料 0」と変らないが、御物本が河内本と「共通異文」を形成する十例中、単独で共通異文を形成するものは僅かに一例に過ぎず、その他は、すべて陽明文庫本を介して共通異文を形成している。この傾向は、「資料 0」と同一であり、陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率は五五・五%で、前資料の六一%にもまたきわめて近い。だが、穂久邇文庫蔵本が、第二類の資料から完全に姿を消していることに注意すべきである。このことについては、

以下の考察で別に論述するが、本文系統論上の帰属にかかわる問題である。

「資料 0」と同じように、河内本の異文が、青表紙本系諸本と共通する異文は存在しないが、別本系諸本と共通し、かつそれらの諸本が、河内本と共通異文を形成するもの、別本系諸本と青表紙本系諸本の間で、共通する異文やほぼ共通する異文を形成するものなどは存在する。それらは、次のような形であらわれる。() 内は、ほぼ共通する異文。

(イ) 河・陽・横、天・1

(ロ) 御・穂・横、肖、三、天・1

(ハ) 穂・池、肖、三、天・1

(ニ) (御、穂・) 池、肖、三、天・1

(ホ) 穂・横、池、肖、三、天・1

(ヘ) 陽、御、穂・天・1

(ト) 穂・池、肖、三・1

別本系諸本の独自異文は、異文総数十四例に対して、独自異文率は、陽明文庫本、御物本各八例五七・一%、穂久邇文庫蔵本五例三五・七%である。この数値は、「資料 0」の「陽」、「御」の関係に近似するが、穂久邇文庫蔵本の独自異文率はかなり高くなっている。更に、別本系諸本間の共通異文は、「陽、御」の形であられるもの三例二一・四%に過ぎず、この数値も「資料 0」に近似する。

穂久邇文庫蔵本は、河内本と共通異文を形成するものは皆無であり、別本と共通異文を形成する場合も、青表紙本系諸本を伴う。「御」との共通異文三例、「陽」一例に過ぎない。これに対して、青表紙本系諸本と共通異文を形成するもの七例、うち三例は別本とも共通異文をつくっている。「資料 0」の分析を通して指摘してきたところであるが、

こういう「御」の、「穂」とのかかわり方は、「御」の対青表紙本との関係とともに、御物本の本文的性格、系統を考えていく上で注意していかなければならないことである。と同時に、やはり穂久邇文庫蔵本の青表紙本系諸本とのかわりという点でも注意すべきことがある。

「資料 2」 ⑩・⑪

河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の他の異文二十一例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・御・14 (ロ)陽・6 (ハ)御・1

河内本の独自異文率は一九％で、「資料」「0」「1」に比較すると二分の一以下で低い。助詞一語を添えたもの二例、他の語に置きかえたり、語を挿入したりしているもの二例となっている。やはり、河内本の独自異文は、数値の面からも、内容の面からも、その独自性はかなり低いといえることができる。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元する。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・25(5) 御・19(4)

第六類の異文数は重複を除くと四例である。河内本の異文総数二十九例中、「共通異文」は二十五例で、共通異文率は八六・二％である。「資料」「0」「1」に比較すると、十数パーセント高い。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本八六・二％、御物本六五・五％である。「共通異文」数に対する親近度は、「陽」一〇〇％、「御」七六・〇％である。この数値も「資料」「0」「1」に比較するとかなり高いが、御物本が、河内本と「共通異文」を形成する十九例中、単独で共通異文を形成するものは僅かに一例に過ぎず、その他は、すべて陽明文庫本を介して共通異文を形成

している。この傾向は、「資料」「0」「1」と同一であるが、陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率は七六・〇%と非常に高くなっている。これらの事実は、「河内本対別本」という対立関係が稀薄となり、両系の本文がきわめて接近していることを示すものである。対立する別系統の本文として位置づけていくことが、躊躇されるほどである。

穂久邇文庫蔵本は、「資料 1」と同じように第二類から姿を消している。だが、

⑩聞き知る——あはれも聞き知る 御・あはれは聞き知る 池、三・穂・

⑪心のどかかを——心のどかにも 穂・心のどかにもとて 陽、御・⑩のもの——ものね 陽、穂・ものもの 天・
という三例の異文を注意深く読みとり、表記に関わる独自異文を考えていくと、穂久邇文庫蔵本は、やはり別本系諸本とも無関係であると言いい切れない、微妙な性格をもっていることがわかる。本文系統論上の帰属については、全体の資料の分析を通してなされる必要がある、にわかに即断すべきではない。

別本系諸本の独自異文は、次のような関係で異文を形成する。

(イ)御・8 (ロ)穂・6 (ハ)陽・3 (ニ)御・陽・3 (一) (ホ)陽・穂・2 (一)

別本の独自異文総数は二十二例で、諸本の独自異文率は「御」五〇・〇%、「穂」三六・四%である。これに対して、共通異文率はきわめて低く、「陽」二二・七%、「御」二三・六%、「穂」九・一%に過ぎない。「御・陽」の形であらわれるもの一三・六%、「陽・穂」九・一%と、共通異文をつくる百分率は非常に低い。ただ、共通異文の形成に当たっても、陽明文庫本が、中心的役割を果す諸本となっていることは、共通異文の形成という視点からすれば、「陽」一〇〇%、「御」六〇%、「穂」四〇%という比率からも、それは、明らかである。

「資料 0」に見られたように、河内本の異文が、別本系諸本と共通し、かつ大島本以外の他の青表紙本系諸本と共

通ずる異文は存在しない。この点では「資料 1」と同じである。だが、穂久邇文庫蔵本が別本諸本と共通異文をつくる場合、青表紙本系諸本を伴うという、「資料 1」の傾向は、「陽・穂・2(1)」によって否定されている。この事實は、「穂」の系統論的性格・帰属を考えていく上で、「資料 1」の傾向を否定するものとして、きわめて重要であり、示唆するところが多い。しかし、「第九・十類」として分類した「⑩聞き知る」の「御」「穂」「池、三」の異文関係は、「資料 1」の分析の最後に述べた「御」「穂」の本文的性格、系統を考えていく上で、その論拠を補強するものとなっている。

青表紙本系諸本の独自異文は、横山本、天理図書館蔵 伝冷泉為相筆本に限られる。集計すると、

(イ)天・9 (ロ)横・2 (ハ)天・横・1

となり、「天」に独自異文が多い。だが、その異文の内容は、第八類に示したように、表記、語に関わるものがほとんどである。

「資料 3」 ⑫・⑬

河内本の独自異文は六例で、青表紙に対する河内本の他の異文三十例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・18 (ロ)陽・御・9 (ハ)御・3

河内本の独自異文率は二〇・〇%で、「資料 2」とほとんど変わらないが、河内本の独自異文は、数値の面からも、内容の面からも、その独自性はやはりかなり低いということが出来る。ただ、独自性が最も高い異文「⑬ありけり誰ならむ——あり・」は、「——あり誰ならむ 御・」「——ありけり 陽・」という二つの異文の「ナシ」の部分を取り合わせると、混成される本文であるが、これは偶然の一致とすべきであらうか、やはり、全体の異文の集計を通して判断す

べき問題であるように思われる。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元する。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・29(2) 御・15(3)

第六類の異文数は重複を除くと二例である。河内本の異文総数三十八例中、「共通異文」は三十二例で、共通異文率は八四・二％である。この数値は「資料 2」の八六・二％に近似する。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本七六・三％、御物本三九・五％である。「共通異文」数に対する親近度は、「陽」九〇・六％、「御」四六・九％である。この数値は、「資料 1」に近似する。御物本が、河内本と「共通異文」を形成する十五例中、単独で共通異文を形成するものは三例で、その他は、すべて陽明文庫本を介して共通異文を形成している。この傾向は、一般的には前「資料」と同一であるが、第二類「⑩」に示したように、単独で御物本が、河内本と共通異文を形成するものが三例あり、陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率も五一・七％と、「資料 2」に比較すると低くなっている。⑬のこうした傾向を、河内本の独自異文の項で指摘した「⑩ありけり誰ならむ——あり」の本文的事実と重ねていくと、河内本の成立過程のなかで、陽明文庫本、御物本のような諸本が果してきた役割について、重大な示唆を与えることになるが、やはり、全体的な集計と分析を通して判断すべきことからのように思う。「河内本対別本」という対立関係が稀薄になり、「青表紙本対河内本・別本」という関係が浮き彫りにされていくなかで、微視的に見られるこうした本文的事実は、やはり注意深く読みとっていく必要がある。

別本系諸本の独自異文は、数の面では著しく増加する。集計すると次のようになる。

(イ) 御・18 (ロ) 陽・16 (ハ) 穂・2 (ニ) 陽・穂・1

別本の独自異文総数は三十七例で、諸本の独自異文率は「御」四八・六%、「陽」四五・九%、「穂」八・一%である。これに対して、共通異文は「陽・穂」一例、二・七%に過ぎず、それも音便形をもとの形にした表記に関わるものに過ぎない。

河内本の異文が、別本系諸本と共通し、かつ大島本以外の他の青表紙本系諸本と共通する、第四類の異文が存在する。これは「資料」「0」に存在し、「1」「2」には見られない用例で、「3」に存在するが、二例は、いずれも別本系では「陽」、青表紙本系では「池」が関与する。陽明文庫本、池田本のこういう性格は、やはり、注意していかなければならないことのように思われる。

青表紙本系諸本の独自異文は、「資料 2」に見られるように、「横」「天」の二本に限定された形ではあらわれない。集計すると、

(1)天・1 (2)池・1 (3)横・1 (4)肖・1 (5)横・天・1 (6)横・肖・1

となり、横山本三例、五〇・〇%、天理図書館蔵 伝冷泉為相筆本、肖柏本各二例、三三・三%、池田本一例、一六・七%と四本に亘る独自異文が見られる。やはり、「横」「天」が独自異文の中心的役割を果していることは、両本の百分率が八三・三%に達していることから明らかである。

「資料 4」 ⑭・⑮

河内本の独自異文は十例で、青表紙本に対する河内本の他の異文十五例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(1)陽・11 (2)陽・御・4

河内本の独自異文率は六六・七%で異常に高い。表記に関わるもの四例、語に関わるもの三例、語句に関わるもの三例

で、その異文は、数値の面からも、内容の面からも、独自性がかなり高い。それは、やはり、独自異文率が異常に高いことと、深く関わるものと思われる。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元する。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・17(2) 御・7(3)

第六類の異文数は重複を除くと四例である。河内本の異文総数二十九例中、「共通異文」は十九例で、共通異文率は六五・五%と低い。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本五八・六%、御物本二四・一%である。「共通異文」数に対する近親度は、「陽」八九・五%、「御」三六・八%である。御物本の百分率が、著しく低くなっているが、河内本と「共通異文」を形成する七例のうち、第六類の一例が単独で共通異文を形成しているに過ぎない。その他は、すべて陽明文庫本を介して共通異文を形成している。陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率も、四一・二%と、「資料 3」に比較すると更に十パーセント以上も低くなっている。これらの事實は、御物本の本文的独自性が、きわめて稀薄なものになっていること、河内本と陽明文庫本の親近度は九〇%に近く、かなり親密であること、河内本の本文的独自性が高いこと、などを示すもので、「資料 3」までの傾向とは異質な面があらわれている。

別本系諸本の独自異文も、「資料」「3」と比較すると著しく減少し、数値的には「2」に近似する。集計すると次のようになる。

(イ) 御・7 (ロ) 陽・6 (ハ) 御・陽・1

別本の独自異文総数は十四例で、諸本の独自異文率は「御」五七・一%、「陽」五〇・〇%である。これに対して、共通異文は「御・陽」一例、七・一%に過ぎない。このような、共通異文率の低下の現象は、河内本との共通異文の形成

と密接に関わるもののように思われる。

青表紙本系諸本の独自異文は六例で、集計すると、次のようになる。

(イ)天・3 (ロ)横・2 (ハ)肖・1

この数値も、基本的には「資料 3」と同じで、「天」「横」が中心であり、両本の百分率は、「資料 3」と同じく八三・三%に達している。

河内本の異文が、別本系諸本と共通し、かつ大島本以外の他の青表紙本系諸本と共通する、第四類・第四類をほぼ合わせ持つ第五類の異文が、「資料 3」にひき続いて存在する。四例の異文は、次のような関係で共通異文をつくっている。括弧内は第五類の異文であることを示す。

(イ)陽、御・天・1

(ロ)陽、御、穂・横、肖、三、池・1

(ハ)陽・横、肖、三、池、天・1

(ニ) (御・三、穂・) 1

「資料」「0」「3」「4」にあらわれた共通異文数を諸本に還元し、中間的に集計すると、次のようになる。

(イ)陽・11 (ロ)池・9 (ハ)三・9 (1) (ニ)御・8 (1) (ホ)肖・6 (ヘ)横・5 (ト)穂・4 (1)

(チ)天・2

やはり、共通異文の形成に中心的役割を果しているのは、「陽」「池」「三」「御」の諸本である。これらの関係を、第九・十類との関係で捉えていくと、「青表紙本対河内本・別本」という事実を根底にすれば、同一傾向を示すものと想定すべきである。だが、それらを中間的に集計した結果によれば、「穂」12(1)から「陽」5に至る資料の順位は、

「横」「三」「天」を除外すると、逆の傾向を示している。このことは、論理的には、根底となる事実を否定することになるが、穂久邇文庫蔵本の系統論的性格と帰属に関わる問題であるようにも思われる。やはり、穂久邇文庫蔵本が、第二類から姿を消している事実と、密接に関わる問題ではあるが、全体の資料を集計、分析しながら判断しなければならぬ。

「資料 5」 ⑬・⑭

河内本の独自異文は十例で、青表紙本に対する河内本の他の異文三十一例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・21 (ロ)陽・御・7 (ハ)御・3

河内本の独自異文率は三二・三％で、「資料」「4」の二分の一にも充たないが、「2」「3」などに比較すると高い。だが、語句に関わる異文は一例、その他は語に関わるもので、河内本の異文は、やはりここでも、数値の面、内容の面から、その独自性はかなり低いと見られる。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元する。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・29 (2) 御13 (3)

第六類の異文数は重複を除くと三例である。河内本の異文総数四十四例中、「共通異文」は三十四例で、共通異文率は七七・三％である。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本六五・九％、御物本二九・五％である。「共通異文」数に対する親近度は、「陽」八五・三％、「御」三八・二％である。御物本が、河内本と「共通異文」を形成する十三例中、単独で共通異文を形成するものは三例で、ほぼ共通する異文である第六類の中にも一例ある。これを加える

と四例に達する。陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率も四四・八%で、「資料 4」に比較すると更に低くなっている。既に「資料 4」で指摘したことではあるが、「資料 5」第六類「⑩心かけたるにも——心かけたるに 陽・心かけたるも 御・」の河内本の異文は、「陽」、「御」の二つの異文から混成し得る本文であり、河内本の成立過程のなかで、両本のような諸本が果してきた役割について、重大な示唆を与えることになるが、やはり、全体的な集計と分析とを通して判断すべきことからのように思う。

別本系諸本の独自異文を集計すると、次のようになる。

(イ)御・15 (ロ)陽・15 (ハ)陽・御・4 (ニ)穂・2

別本の独自異文総数は三十六例で、諸本の独自異文率は「御」「陽」ともに四一・七%、「穂」五・六%で、この数値は「資料 4」に近似する。共通異文は「陽、御」四例、一一・一%と、比率は隣接資料に比較するとかなり高くなっている。

河内本の異文が、別本系諸本と共通し、かつ大島本以外の他の青表紙本と共通する、第四類の異文は、「資料」「3」、「4」にひき続いてここにも存在する。「⑩着かへ給ひ——着かへ給ふ 陽・天」とした異文は、「天」に、「きかへ給つれなういまくるやうにて」とあるが、隣接部分に「をもしろうふき給御事めして」(傍点筆者注)の「給」は終止形であるから、資料のごとく読んだ。ところが、「⑩撫子は——撫子を 陽・天」とした異文は、「天」の「を」が「を」と見せ消ちになっているようにも読める。「は」「を」のないのは御物本で、そう考えると第九類の異文となるが、「天」の本来の異文であること、この二つの用例が、きわめて近くに存在し、しかも、ともに「河・陽・天」の形であらわれていることを考慮して、しばらく第四類に分類する。「資料 4」では「陽・池」という形であらわれたが、「池」にかわって「天」が、陽明文庫本と関わる異文となっている。

青表紙本系諸本の独自異文を集計すると、次のようになる。

(1) 天・5 (ロ) 横・3 (イ) 池・1 (ニ) 横・肖・1

独自異文は十例で、青表紙本系諸本の独自異文率は「天」五〇%、「横」四〇%、「池」「肖」各一〇%で、「天」「横」両本の独自異文率は、やはり、八〇%に達している。

穂久邇文庫蔵本は、ここでも第二類の「資料」から姿を消している。そして、河内本、別本との共通異文も存在しない。独自異文二例を除くと、ことごとく青表紙本の本文と同一である。

「資料 6」 ⑬・⑭

河内本の独自異文は四例で、青表紙本に対する河内本の他の異文三十例は、別本諸本と、次のような関係で共通異文を形成する。

(1) 陽・20 (ロ) 陽・御・8 (イ) 御・2

河内本の独自異文率は二三・三%で、「資料」「5」の二分の一にも充たない。「0」から「5」の六資料中最低であり、数値、内容の面からも、その独自性はきわめて低い。

次に、河内本と別本との共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。括弧内は、第六類の、ほぼ共通する異文の内数である。

陽・30 (2) 御・10

第六類の異文数は二例である。河内本の異文総数三十六例中、「共通異文」は三十二例で、共通異文率は八八・九%とかなり高い。異文総数に対する諸本の共通異文率は、陽明文庫本八三・三%、御物本二七・八%である。「共通異文」数に対する親近度は、「陽」九三・八%、「御」三一・三%である。御物本が、河内本と共通異文を形成する十例中、単

独で共通異文を形成するものは二例に過ぎない。陽明文庫本に対する御物本の「共通異文」数の比率も三三・三%で、「資料 5」に比較すると更に低くなっている。

別本系諸本の独自異文を集計すると、次のようになる。

(1) 御・14 (2) 陽・7 (3) 穂・3 (4) 陽・御・1 (5) 陽・穂・1

別本の独自異文総数は二十六例で、諸本の独自異文率は「御」五七・七%、「陽」三四・六%、「穂」一五・四%である。共通異文は「陽・御」「陽・穂」各一例、三・八%に過ぎない。

青表紙本系諸本の独自異文を集計すると、次のようになる。

(1) 天・3 (2) 池・2 (3) 横・1 (4) 横・池・肖・三・1

独自異文は七例で、最も多い「天」「池」の独自異文率は四二・九%である。

第九類に分類した異文四例は、別本とは言っても、いずれも「穂」が関与するのみであり、「穂」を青表紙本として扱えば、第八類に分類すべき異文である。しかし、「¹⁹人の心の——人の心 陽、穂・大(河内本系)・」とあるのは、やはり穂久邇文庫蔵本が、別本、河内本に関わる一面をもつものであることを示している。やはり、こうした本文的事実を正確に集積していく必要がある。

「資料 1」 ⑧・⑨

第一類

⑧手には——には・⑧侍ら——はむへら・

⑨侍らざるに——はんへらざるを・⑨後めたう——後めたく・⑨梅の香——梅のかほり・⑨思ひて——見て・⑨

口惜しけれ——口惜しうはむへれ・

第二類

⑧煩はし——なま煩はし 陽、御・⑧煩はしと思へ——煩はしけれ 陽・⑧父の——この父の 陽、御・⑧時々ぞ——時々 陽・⑧通ひける——通ひすみけるを 陽・⑧住みもつかず——住みうくて 陽、御・⑧御あたり——御けはひ 御・

⑨もの——こと 陽、御・⑨ねたかるべきを——ねたかるへし 陽、御・⑨据ゑ——すゑをき 陽・⑨参りたれば——まうて、見れば 陽、御・⑨さながら——おろさて 陽・⑨をかしき——をかしきほと 陽・⑨ものし給ふ——をはするなりけり 陽、御・⑨まさり侍らむ——まさらむ 陽・⑨思ひ——思ふ 陽・⑨気色——月 陽、御・⑨誘はれ侍り——誘はれ 陽、御・

第四類

⑧給う——給ひ 陽・横、天・

第六類

⑨帰らむはいと——かへらはいと 陽・

第七類

⑧手に——つらに 陽・⑧ばかりに——はかりのに 御・はかり 陽・⑧聞えなすを——聞えなす 陽・⑧いたう——いたく 穂・⑧ものせむ——たちよらむ 陽、御・⑧思へど——思へけれと 御・思へとも 穂・⑧あたりを——あたり 陽・⑧来る——かよひける 御・⑧しるく——するき 陽、御・⑧月——月の 穂・
⑨侍らざるに——はへらざるものを 陽、御・はへらざる 穂・⑨思ひて——思ふ 陽・⑨まさり侍らむ——

まさり侍 御・⑨え承はらぬ——承はらぬ 御・

第八類

⑧とむ思ふ——ナシ 横・⑧御心とまるばかり聞えなすを——ナシ 天・⑧御あたり——あたり 横、池、肖、三
・⑧ここには——ここに 肖・

第九類

⑧手——手つかひ 横、肖、三、天・穂・⑧のたまへば——かたらひ給 池、肖、三、天・穂・⑧いへど——いへは
横、池、肖、三、天・穂・

⑨一声も——一声 陽、御、穂・天・⑨気色——けはひ 池、肖、三・穂・

第十類

⑧あらずや侍らむ——はへあらずやあらむ 御・はへらすやあらむ 池、肖、三、天・はへらすもやあらむ 穂・

「資料 2」 ⑩・⑪

第一類

⑩聞き——もののおはれ・⑩人こそ——人こそは・⑩をかしう聞ゆ——をかしう聞ゆるに・

⑪立聞——けはひ立聞・

第二類

⑩言へば——きこゆれば 陽、御・⑩とて召し寄するも——きんめしよするも 陽・⑩あいなういかゞ聞き給はむと
——いかかきき給はむとあいなう 陽・⑩何ばかり——何はかりの 陽、御・⑩さびしき——ものさびしき 陽、御・

⑩所狭く——ナシ 陽・⑩据ゑたり——ナシ 陽・⑩名残なく——名残なくて 御・⑩おもほし——おもひ 陽、御・
⑩あはれなる——おかしうもあはれにもさまさまなる 陽、御・⑩事ども——事は 陽、御・⑩思ひ続けても——思ひ
続けて 陽、御・⑩思さむ——おもはん 陽、御・⑩と心——なと心 陽・

⑪かどある者——かどめいたるころ 陽、御・⑪耳馴らさせ——耳馴らい 陽、御・⑪侍るめり——侍るをみかう
しまいりなむかし 陽、御・⑪侍りつる——侍りつるを 陽、⑪にもこそ——にもそはんへるとて 陽、御・⑪み格子
参りなむとていたうもそゝのかさで帰りたれば——帰りぬ 陽、御・⑪ねたう——ナシ 陽、御・

第六類

⑩人もこそとのたまひて——人もとのたまひて 陽、⑩きんめしよするも——きんをめしよするも 御・⑩殊にすこ
きもの——殊にすこきこゑ 陽、御・

⑪いたうもそそのかしきこえすくもりかち——いたくもそそのかしきこえすくもりかち 御・そそのかしもきこえす
くもりかち 陽、⑪心のとかにとて——心のとかにもとて 陽、御・⑪をかしく——をかしう 陽・

第七類

⑩とて——とのたまひて 御・⑩鳴らし給ふ——鳴らし給ふを 陽、御・⑩聞ゆ——きゝ給に 陽、きゝたまふを
御・⑩音がらの——音から 御・⑩いたう——いたう 陽、いたく 穂・⑩をかしう——をかしく 穂・⑩古めか
しう——古めかしく 穂・⑩かしづき据ゑ——かしつき 御・⑩名残なく——名残ならて 陽、⑩いかに——ナシ 陽
・⑩なからむ——なからん 陽、⑩物語——物語など 御・⑩ありけれなど——ありけれ 陽、御・⑩思ひ——おほし
御・⑩心——心は 御・

⑪いたう——いたく 穂・⑪侍りつる——侍りつるに 御・⑪心のとかにを——心のとかにも 穂・⑪いたう——い

たく穂・⑩もの——もののね 陽、穂・⑩同じく——同しう 陽・⑩宣へど——宣へは 御・

第八類

⑩あなれ——あんなれ 横・⑩ばかりやは——はかりにや 天・⑩聞きにくく——聞きにくう 天・⑩渡りて——渡り 天・⑩所狭く——所狭う 横、天・⑩思ひ続けて——ナシ 天・

⑩はづかしく——はづかしう 天・⑩かどある——いとかとある 天・⑩馴らさせ——馴らせ 天・⑩侍るめり——侍るめり 横・⑩侍りつる——侍りつるといひ 天・⑩もの——ものの 天・

第九・十類

⑩聞き知る——あはれも聞き知る 御・あはれ聞き知る 池、三・穂・

「資料 3」 ⑫・⑬

第一類

⑫様にや——様にやは・⑫をかしう思う——をかしく思ふ・

⑬有様——身有様・⑬折々——折々に・⑬ありけり誰ならむ——あり・⑬院に——院へ・

第二類

⑫有様に——けはひを 陽・⑫思ひ——思ひのみ 陽・⑫俄に我も人も——とさやかにをしなへて 陽・⑫うちとけて——うちとけ 陽、御・⑫際と——ことに 陽、御・⑫あれなど——あれと 陽・⑫思さるゝ——をしはからるゝ

陽、御・⑫さやうの——さやうに 陽・⑫気色を——気色 陽・⑫ほのめかせ——ほのめかしきこえよ 陽、御・⑫と語らひ給ふ——などのたまひて 陽・⑫て帰り——たるさまにてそいて 陽、御・⑫まめに——あまりまめに 陽・⑫

こそ——おりおりこそ 陽・⑫給へらるゝ折々——給へられ 陽・⑫かやうの——かやうなる 陽・

⑬うち笑ひ——うち笑ひたまひ 陽、御・⑬あらはされそ——あらはされそかし 御・⑬これを——これをさへ 陽、御・⑬あだだだしきふるまひ——あたくし 陽・⑬言はば——言ひなしては 御・⑬かう——かく 陽、御・⑬言はず——きこえずなりぬ 陽、御・⑬寢殿の方に——きみは寢殿の方にもし 陽、御・⑬の方に——に 陽、御・⑬立てる——立ちかくれたる 陽・⑬と思して——たれならんと思して 陽・⑬つきて——つきてやをら 陽、御・⑬隠れ給へば——のき給ふ 陽・⑬給ひけるやがて——給つるを 御・

第四類

⑫人の——ナシ 陽・池・

⑬たちのき——たちいて 陽、穂・池、肖、三・

第六類

⑫とさやうにをしなへて——とさやうにをしなへて我も人も 御・⑫つけさせ給はん——つけさせ給ならん 陽・

⑬恥しくて——恥しうて 陽・恥しう 御・⑬たちかくれたる——かくれたる 御

第七類

⑫有様——有様おと 御・⑫ものし給ふ——のみそはへる 陽・てものしはへ 御・⑫さま——よう 陽・⑫あれ——あむなれ 御・⑫御程——程 御・⑫なほ——ナシ 陽・⑫さうやうの——さうようなる 御・⑫気色を——気色は 御・⑫語らひ給ふ——語らひ給て 御・⑫方——ところ 陽・⑫おはしますと——おはしますに 御・おはしますと 陽・⑫悩み聞えさせ——悩み 御・悩み聞え 陽・⑫思う給へらるゝ——おほえ給える 御・⑫折々——折々おほく 御・⑫つけむ——つけん 穂・

はぬなりけり 陽、御・⑭心も——心、陽・⑭思ひける程に——思ひつつ 陽・⑭ものの——ことの 陽、御・⑭聞き
ついて——聞きつきて 陽・⑭下待つ——待つ 陽、御・⑭給はで——給はず 陽・⑭知られじ——見えし 陽・⑭給
へる——給へるか 陽・⑭と恨むるも——恨みたるも 陽・

⑮いさめ——あはめ 陽、御・⑮奉る——奉りたまふ 陽、御・

第四類

⑭え見分き——見分き 陽、御・天・⑭歩み——歩みのき 陽、御、穂・横、肖、三、池・

⑮来なむ——来なん 陽・横、池、肖、三、天・

第五類

⑭給へる——たまひつるか 御・給つる 三・穂・

第六類

⑭ひきすき給へる——ひきすき給つる 陽、御・(平)・⑭寄りきて——寄りきぬ 御・

⑮おくらかしたまはてこそあらめすいしむから——をくらさせ給はてこそあらめすいしんから 陽・おくらかせ給
はてこそあらめすいしんから 御・

第七類

⑭狩衣姿の——狩衣姿 御・⑭入り給ひ——い入り 陽・⑭立てるに——ナシ 陽・立てるほとに 御・⑭いで給ふ
——し給ふ 陽・⑭誰とも——誰と 陽・⑭抜き足に——つつみて抜き足に 御・⑭恨むるも——恨むるか 御・⑭た
ねけれど——ねたけれ 御・

⑮と聞え給ふ——ときこゆ 陽・御・⑮まことは——ことは 陽・⑮あるべけれ——あへけれ 陽・⑮事も——事

⑬聞ゆれば——聞えさせれば 御・⑬咎ならはされそ——ナシ 陽・⑬言はば——言ては 陽・⑬あまり——つねにあまり 陽・⑬色めい——色めき 陽・⑬穂・⑬折々——ナシ 陽・⑬やをら——ナシ 陽・⑬たちのき——たちて 御・⑬透垣の——透垣 陽・⑬たち寄り——よりてたち 御・⑬ありけり誰ならむ——男ありけり 陽・あり誰ならむ 御・男ありけり誰ならん 穂・⑬つきて——よりて 御・⑬夕つ方——夕方 御・⑬もろともに——もろともにこそ 御・⑬まかで——いて 陽・⑬給ひける——給へるを 陽・⑬院に——院も 陽・

第八類

⑫有様——御有様 横、肖・⑫あらむ——あらん 天・⑫聞えさせ——きこえ給させ 池・⑫思う——思ひ 横・⑬たちのき——たちき、横、天・⑬やがて——をやかて 肖・

第九類

⑫つけむ——つけん 穂・天・

「資料 4」 ⑭・⑮

第一類

⑭いづち——いつく・⑭かう——かく・⑭立てるに——立てるを・⑭抜き足に——ナシ・⑭御——おほん・⑭仕うまつりつる——仕うまつる・⑭をかしう——をかしく・

⑮かう——かく・⑮いかにせさせ——いかかし・⑮と聞え給ふ——ナシ・

第二類

⑭馬に——馬にて 陽・⑭狩衣姿——狩姿 陽・⑭ないがしろ——ないかしろなる 陽・⑭知り給はぬに——知り給

御・⑮見つけらるゝを——見つけらるゝは 御・

第八類

⑭下待つ——したまへる 横・⑭我と——我とは 天・⑭見給ふに——見給ふ 天・

⑮給はむ——給はん 天・⑮おくらさせ——おくらかせ 肖・⑮あるべけれ——あんへけれ 横・

第九類

⑭程に——程 穂・池、肖、三・

⑮いかに——いにか 陽、穂・横・⑮まことは——まことに 穂・横・

「資料 5」 ⑮・⑰

第一類

⑮知らぬ——たまはぬ・⑮直衣ども——直衣・⑮笛ども——笛ともに・⑮例の——例のえ・⑮すぐし——すこし・⑮いと上手——上手・⑮琵琶は弾けど——琵琶わさと弾く人なれと・

⑮なつかしきをは——なつかしきに・⑮所に——よに・⑮音を——音・

第二類

⑮御心のうちに——ナシ 陽・⑮方にも——かたくありつれと 陽、御・⑮車に——御車に 陽、御・⑮合せて——合せつつ 陽・⑮入りて——入りたまひて 陽・⑮見ぬ——なき 陽・⑮つれなう——つれなく 陽・⑮御笛——笛

陽・⑮面白う吹き給ふ——面白し 陽・⑮琴——琴とも 陽・⑮に心得——ほのめき 陽・⑮わざと——ナシ 御・
⑮頭の君——頭の君の 陽、御・⑮離れてたゞ——離れつつ 陽、御・

①⑦聞えぬに——聞えぬを 陽・①⑦思しなりたれば——思しなりにたれば 陽・①⑦心地して——心地するころにて 陽、
御・①⑦すさまじげに——すさまじげにて 陽・①⑦出でて——出てつつ 陽、御・①⑦あはれげなりつる——あはれけなる
陽・①⑦様なども——様を 陽・①⑦やう——さま 陽・①⑦をかしう——をかしと 陽・①⑦をかしう——をかしげに 陽
・①⑦たらむ時——たらむを 陽、御・①⑦人にも——人に 陽・①⑦などさへ——なとまで 御・①⑦君のかう——君のかく
陽・①⑦過し——やみ 御・①⑦てむやと——なんやなと 陽・①⑦なまねたう——ナシ 陽・

第四類

①⑥撫子は——撫子を 陽・天・①⑥着かへ給ひ——着かへ給ふ 陽・天・

第六類

①⑥心かけたるにも——心かけたるに 陽、心かけたるも 御・

①⑦思しなりにたれば——思しなりにければ 御・①⑦わか心なから——わか心なからも 御・①⑦給へは——給は 陽・

第七類

①⑥え尋ね——尋ね 陽、御・①⑥のうちに——のうち 御・①⑥契れる——契る 陽・①⑥え行き別れ——行き別れ 陽・
①⑥乗りて——なりて 陽・①⑥忍び——いといたく忍ひて 御・①⑥直衣ども——直衣なと 御・①⑥召し——召しして 陽
・①⑥来る——をはする 御・①⑥やうにて——やうに 陽・①⑥すさび——あはせ 陽・①⑥狛笛——狛笛を 御・①⑥給へり
——給いて 御・①⑥おはすれば——おはしければ 御・①⑥面白う——面白く 穂・①⑥は弾けど——いとしゃうすにひけ
と 御・①⑥たゞ——ナシ 陽・

①⑦なつかしきをば——なつかしきを 御、陽・①⑦見奉らぬ——見奉らざらむ 陽、御・①⑦所に——所 御・①⑦なむも
——んも 陽、御・①⑦さすがに——さすが 御・①⑦君たち——君 陽・①⑦琴——もの 陽・①⑦思ひ続け——みつゝけ

穂・⑭らうたき——らうたけなる 御・⑮心苦しきは——心苦しうわれなから 陽・⑯ばかり——はかりに 御・⑰わが心も——ナシ 陽・⑱様悪し——あさまし 御・⑲などさへ——なと 陽・⑳思ひけり——ナシ 陽・㉑気色ばみ——気色み 陽・㉒給ふを——給ふ 御・㉓まさに——ナシ 陽・まさにたゝ 御・

第八類

⑭笛吹き——吹き 天・⑮すさび——すさみ 横・

⑰すまひの——すまひ 天・⑱さまなとも——さまなと 天・⑲をかしう——をかしく 池・⑳心苦しく——心苦しう 横・㉑様悪しからむ——様悪しからん 天・㉒中将——頭中将 横・肖・㉓さては——さて 横・㉔てむや——てんや 天・

「資料 6」 ⑭・⑮

第一類

⑭重し——重くし・

⑮見むとしも——見むとも・⑯思はねばにや——思はねは・⑰深く——深く・⑱なくて——のかたくて・

第二類

⑭いづれも——いづれもく 陽・⑮見えす——見たまはず 御・⑯心やましき——心もとなき 陽・⑰さやうなる

——さやうの 陽・⑱気色——気色に 陽・㉑とりなしなどして——とりなし 陽・㉒あはれなる——あはれにもある

陽・㉓いとかう——いと 陽・㉔まいて——ナシ 陽・㉕けるをや——けり 陽・

⑲見ると——見ること 御・㉖しもなし——もなし 陽・御・㉗しけると——しけりと 陽・御・㉘思はぬ——おほ

さぬ 陽・⑯かうなさけなきを——かかれは 陽、御・⑯すさまじ——いとすさまじ 陽、御・⑯すさまじ——いとす
さまし 陽、御・⑯すさまじく思ひ——すさまじとおほし 陽・⑯給ひにしかとかう——にたるに 陽・⑯中将の——
中将かく 陽・⑯歩きけるを——歩きければ 陽・⑯言多く——いとことは多く 陽・⑯言ひ馴れたらむ——馴したる
陽・⑯たらむ気色——かほならむ 陽、御・⑯憂はしかる——憂れたかる 陽・⑯おぼつかなく——いとおほつかな
く 陽、御・⑯いと心憂き——心憂き 陽・〔翻刻・解説〕では虫食で判読しにくく「□」となっているが、残存部分
から「き」と判断すべきである。⑯こそ——こそは 陽・⑯ものを——を 陽・⑯事なくて——事なくていと 陽、
御・

第三類

⑱折々あらむ——折々あらん 天・

⑲気色なむ——気色なん 天・

第六類

⑳見たまはず——見えたまはず 陽・㉑うもれたるにやとまして——うもれたるわひしとてまして 陽・

第七類

㉒文など——文 御・㉓返事——返事たえて 陽・㉔すまひ——すさひ 御・㉕気色——気色は 御・㉖気色につけ
て——気色を 陽、御・㉗折々——折々の 御・㉘べけれ——へきに 陽・㉙重し——身重し 御・㉚うもれ——うつ
もれ 御・㉛心づきなく——心つきなくいろかたちわろしと申と 御・㉜にけるをや——にけると 御・

㉝見むとしも思はねばにや——ナシ 陽・㉞給ふを——たれば 陽・㉟思ふに——ナシ 穂・㊱ねたし——ねたしと
おもふ 御・㊲しかど——し 御・しかとも 穂・㊳かう——おかしく 御・㊴憂はしかるべけれ——うれたけり 御

・⑩命婦を——命婦に 陽・⑩語らひ——せめありき 陽・⑩方に——方にそ 穂・⑩人の心の——人の心 陽、穂・
(河内本系「大」同ジ) ⑩のどやか——のとか 御・⑩事——は 陽・⑩なくて——なくして 御・

第八類

⑩はかなき——なき 天・⑩うもれ——むもれ 横・⑩悪びたり——わかひたり 天・⑩心にて——所にて 池・⑩
さればよ——されは 池・

⑩答へ給ふを——答へ給ふ 天・⑩顔にて——顔に 横、肖、三、池・

第九類

⑩愁ふれ——愁うれ 穂・天・

⑩いとねたし——ねたくおもふ 穂・池、三・⑩すさまじく——すさまじう 穂・天・⑩おぼつかなく——おほつか

なう 穂・横、池、三・

(昭六十二年十一月五日・未完)

付記—本稿執筆後「御物 各筆源氏」の複製本を入手した。末摘花の巻の本文は別本系統に属するといわれる。それ
については「(二)」で指摘する。